

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 6 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20320098

研究課題名（和文） 近世日本社会における中国情報の摂取と北方観の形成

研究課題名（英文） assimilations of Chinese informations and formation of views on northern region in Japan at early modern times

研究代表者

浪川 健治（NAMIKAWA KENJI）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：50312781

研究成果の概要（和文）：

本研究は、日本近世史の研究者である浪川健治を研究代表者とし、日本近代史の山下須美礼、日本民俗学の研究者古家信平と清朝史・東北アジア史の研究者である楠木賢道が研究分担者となり、近世社会の知識人が持つ北方認識・北方観がどのように形成されたか、またそれが一般の生活者にどのような影響を与えたかを解明したものである。北東北と九州西北域をフィールドに、異分野の共同研究により時間と空間の広がりの中に解明した。

研究成果の概要（英文）：

This research project is represented by Kenji Namikawa who engages in study of Japanese early modern history and also shared by Yamashita Sumire, a researcher of Japanese modern history, Huruie Sinpei, a researcher of Japanese folklore and Yoshimichi Kusunoki who researches history of Sin dynasty and the northeastern Asian history. We clarified the way how the intellectuals who lived in early modern society formed their views on northern region and its effect on the general public. To clarify how the views on northern region live in the modern and the present age, we choose the north part of Tohoku district where the views on northern region had an important effect on the people who lived in there as our main field of research and northeast region of Kyusyu district for comparison. Researchers who have different fields were gathered in order to solve our theme in expanse of time and space.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2009年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2010年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2011年度	2,900,000	870,000	3,770,000
年度			
総計	15,000,000	4,500,000	19,500,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本史

キーワード：近世史・清朝・対外関係・ハリストス・北方観・グローバリズム・ロシア

1. 研究開始当初の背景

本研究は北方認識・北方観が生活者に取っても重要な意味を持っていた北東北をフィ

ールドとして、異分野の研究者の共同研究により解明することを試みるものである。このような研究手法は、なによりも閉鎖的な国家

空間のなかではなく、これらの地が 18 世紀には対外関係の緊張=プレ産業化段階のグローバリズムによって、本来予想されなかった「外圧」に早期に直面し、政治体制の枠組みのあり方のみならず、為政者から民衆生活に至るまで強く、他者としての異国とその文化を意識せざるを得なかったからである。とくに、近世日本社会における北方認識・北方観の形成には、同時代の中国であり、東北アジアまで版図とした清朝からの情報が重要な役割を果たしていたことは言を待たない。この清朝からの情報は主として、長崎に輸入される漢籍を通して得たものである。したがって本研究のテーマは近世日本という枠組みからだけで解明されるものでなく、学際的に清朝史、清代東北アジア史、及び漢籍に関する専門知識が必要となる。そのことが、本研究を他分野の研究者によって推進する背景となったのである。そのことは、それぞれがどのような知識を共有して自己認識を形成するか、そしてグローバル化に対応するかという今日的課題にも直結する。

今日のグローバル化(グローバリゼーションと記述)は、市場の開放、規制緩和、民営化などを不可避のものとして、我々の社会を変えて行く。同時に政治や文化のグローバリズムとして EU にみられるような国民国家を越えたトランスナショナルな国家形成の可能性も内包する国家間の対立、あるいはエスニシティとしての民族問題の顕在化という矛盾を内包しつつも現実化している。また国家の枠を越えて合法的か非合法化を問わず流動する労働力やそれを受容する地域との軋轢、さらには市場経済を拒否する宗教・文化・伝統に基づく地域社会との対立構造は、グローバリズム化される政治や文化のなかでより一層先鋭化する地域-世界観と強烈なアイデンティティを生み出している。しかし、それはこの過程でまったく新たなものとして生まれ出てくるのではなく、個人あるいは集団が帰属すると考える時系列のなかに生まれた認識に根元を持ち、グローバリズム化される世界との接触あるいは対峙のなかに対抗軸として共有されるものである。そうした、グローバル化の歴史的意味を、本研究では産業化以前の世界と東アジア秩序の相克としてとらえ、グローバル化がもった歴史性とその世界・地域・民族への規定を知識の形成と世界認識のなかに探ろうとした。

2. 研究の目的

近世人が共有した知的世界としての東北アジアを、北奥という地域を生きた人々の「知」の営みの豊かさと多彩さのなかに追求するとともに、文化の主体として近世人の足跡を明らかにすることを本研究は目的とする。日本史研究においては、政治レベル・経

済レベルでの歴史の大きな動向と同時に、そこに生きた人々の生活の息づかいや思想・人的ネットワーク、情報の伝達状況等々、ソフトかつミクロな面への関心が高まり地域としてこれを見据える研究の進展が著しい。広域的な政治あるいは文化的な中核をなした国家を中心とする枠組みのなかに自らの位置を置き、周辺の諸国家あるいは民族との間の、時には緊張した関係を解明することは、今日のグローバル化へと至る直接的な起点が、そうした広域的な諸関係から世界的なそれへとという質的な転化によってもたらされたことにあったことを指し示している。

その際の方法として、こうした視点からは、まさに国家を相対化する方法としての地域論に着目した。同時に、歴史的な社会と文化の多層性と現代社会における単層的で多様なおり方を捉え、現代社会の課題を歴史において検証するための方法としての社会史にも着目した。そして、時代心理や帰属意識にかんする関心としてのアイデンティティ研究が求められてくるのである。本研究は、それらの相互の歴史的な相克のなかに、固定的・静態的な歴史像ではなく、動的・可塑的な実態としての歴史像を提示することに成功している。

3. 研究の方法

知の総体としての東北アジア世界と日本という歴史的位置関係とその認識について近世社会のなかから明らかにした。この、第1の基軸として、知の占有者としての大名領主自身に焦点をあて、どのような関心のもと、藩主自身が漢籍を収集し、自ら書き残したか、また、近仕の者が書き留めたかを考察する。とくに、いわゆる名君像が作り上げられた17世紀中期とされる藩政確立期から動揺に至る18世紀後半に至る時振を取り上げ、弘前・盛岡・会津の各藩主に関する著述とその知的基盤としての東北アジアの文化理解に着目しその解明を図った。

第2の基軸は前記の諸藩を中心として、17世紀中期から18世紀後半に至る藩政の確立期から動揺に至る時期を取り上げ、藩士あるいは武士階級に属する者の言説を検討する。とくに、家老職にある者の幼君補佐についての心構えや読書の記録、藩士たちの改革意見書、学政に対する献策、藩植関係の史資料を考察した。そこから、北方社会からの文化接触の動きから生まれた言説が、知的世界のなかにかに東北アジア社会を定置するかを明らかにした。

第3の基軸として、藩という政治支配単位を離れて、北東北の豊かな地域性と体系性を合わせ持つ思想書や学問的な言説を考察した。この視点は、とくに北方世界のなかから自らを置き、そこに生きた人々が生み出した、

複合的な生産と生活の実態に基づく諸関係を明らかにする。ここでは、とくに、近代移行期までふくめ、新たな文化の流入が、地域社会のなかにいかなる知識の変容と世界像を持ち込むものであったかを、近世を通じて形成された日本一東北アジアの文化論理の相克のありようによって示した。また、北東北の生活者が体験や見聞によって直接得た北方に関する情報が、日本海を挟んだ対岸である清朝の東北部ではどのように把握されていたのかを、楠木が満洲語文書史料から分析した。

第4の基軸として、第3の基軸で検討する生活者の「知」の世界が、どのように民俗事象として七会に内在化され近現代に伝えられていったのかを浪川による文献研究と古家によるフィールドワークに基づく民俗研究という視点から検討した。

4. 研究成果

研究代表者・分担者・協力者で活発に議論し、北東北近世人の中国情報の摂取⇒北方観・北方認識の形成―や生活者による内在化のプロセスとメカニズムを提示するという研究成果を得ている。その多様な成果は、次の5、主な発表論文等、に示される多岐にわたる学的成果の上に実現したものである。科研「近世日本社会における中国情報の摂取と北方観の形成」は、集積したデータを基にして研究の体系化のうえに研究を推進したものであり、蝦夷地における通辞の果たした文化的な役割の外、北方の緊張の高まりとともに派遣された弘前・盛岡藩をはじめとする藩政資料や藩士に関わる資料の解明に努め、中国を介した東アジア理解から安政二年以降の欧米を軸とする近代移行期の北方世界に対する認識への変化が日本史あるいは東洋史という枠組みを越えてグローバルな世界像を明らかにすることに成功した。

本研究を通じて、歴史のなかに人間と人間が持ち得ていた可能性を、プレ産業化段階におけるグローバリズムが歴史、すなわち変容する時間と空間の構造のなかで、人々がみずからの生産や生活にもとづいて形成した世界、すなわち「生きている地域」の論理と構成のありかたが、記憶にまで踏み込むような新たな視点と方法によってあきらかにされた。それは、実証性と理論性に裏打ちされた研究の成果、そこで示された新たな視角と方法であり、本研究の大きな成果となっている。

グローバル化がもたらしたものは、直接的には国家を越えた、あるいは国家内部の封建的な枠組みを越え、その秩序を崩壊させる人・物・情報の移動の広域化である。本研究は、プレ産業化社会によるグローバル化による「外圧」と産業化された社会による市場開拓を含めたグローバル化の二つの段階からな

る「外圧」について、日本を研究対象の一つの基軸に置きながら、日本を含む東アジア秩序が両者をどのように認識したのかの解明を基軸に据えた。そこでは、プレ産業化社会によるグローバル化が国家的な対応と地域変容を、内的な東アジア世界の秩序の危機への対応と再編を導きだすものとして東アジア世界全体のなかに位置づけ、近代を展望するグローバル化への基盤形成が行われたという視点からとらえることを目的とする。本研究を通じて、歴史のなかに人間と人間が持ち得ていた可能性を、プレ産業化段階におけるローバリズムが歴史、すなわち変容する時間と空間の構造のなかで、人々がみずからの生産や生活にもとづいて形成した世界、すなわち「生きている地域」の論理と構成のありかたが、記憶にまで踏み込むような新たな視点と方法によってあきらかにされた。それは、実証性と理論性に裏打ちされた研究の成果、そこで示された新たな視角と方法であり、本研究の大きな成果となっている。

本研究の成果と課題は、18世紀から19世紀初頭の日本におけるグローバル化への基盤の形成と展開を、東アジア世界全体のなかに位置づけ、グローバル化の基盤形成の全体像とその背景、そして影響について分析・吟味することにある。そのことを通じてグローバル化一般が生み出す矛盾だけでなく、グローバル化の過程における特質と、したがってその限界という規定性をも明らかにしようとするものである。この研究成果は、日本史が中心となり、東洋史・民俗学との共同研究で行なう。そのことによって東アジアにおけるグローバル化最初期において、知識人や政権担当者がどのような思索をして時代を乗り切って行ったかの内省的な研究の深化が期待され、混迷するグローバル化された現在を着実に歩むための指標を与えるという本基盤研究の方向性の確かさを物語るものである。

従来、18世紀、とくにその前半は日本の「四つの口」論が象徴的に示しているように、とくに日本海を環周する国家と民族にとって相対的な対外安定期であり、19世紀後半からの「外患」、すなわち資本主義の世界的展開に基づく「外圧」による開国要求こそが対外秩序を解体し近代化への道が造られるものとされてきた。しかし、この「外圧」は時期的、質的に二重の構造をもっており、ただちに開国=世界資本主義への包摂に結びついたものではない。すなわち、産業化された社会による市場開拓によるものか否かが、「外圧」のあり方の本質を基本的に規定するのである。すなわち、グローバル化はやがての近代化をもたらすものであっても、あくまでも近代にいたる過程であり、近代それ自体ではないことに留意すべきであろう。したがって、

本研究によって「外圧」を産業化された社会による市場開拓を含めたグローバル化とそれに先行するプレ産業化社会によるグローバル化、後者を経験することにより東アジア世界がどのように前者、すなわち世界資本主義の展開による開国についてグローバル化を理解しようとし、その基盤を形成していたのかを明らかにするべき必然性を導き出すことができた。本研究は、さらにプレ産業化社会によるグローバル化による「外圧」が日本のみならず、東アジア世界全体に関わりその世界秩序と異質な世界秩序との抵触を意味していることを示唆するものである。

この点において、東アジア世界は、決して静態的な存在ではなく、国家を中心とした官貿易システムを基軸しながらも、つねにその規定を逸脱する脱法あるいは違法の非公然の交易・通交体系を含んだ、一定度の交易・移動を前提として成り立っていたことを、18世紀の段階での東アジア世界と秩序の歴史の上に描き出すことが、次の課題として求められてくるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 14 件)

- ①浪川健治「幕末における芸能興行とその受容－弘前藩領をめぐる動向と娯楽享受－」『歴史人類』第 39 号, 査読有, 53-87 頁, 2011 年.
- ②楠木賢道「清太宗皇太極の太廟儀式和堂子－關於滿漢兩種儀式的共処情況－」『清史研究』第 81 期, 査読有, 124-129 頁, 2011 年.
- ③・浪川健治「幕末における芸能諸集団と「差異」化の論理－弘前藩領における娯楽享受と他者認識－」『人民の歴史学』第 185 号, 査読有, 1-12 頁, 2010 年.
- ④浪川健治「『津軽之喜太夫』考－元禄－享保期における弘前藩領の歌舞伎集団と自己認識－」『弘前大学國史研究』第 129 号, 査読有, 1-20 頁, 2010 年.
- ⑤楠木賢道「『両国会盟録』中所見志筑忠雄与安部龍平対清朝北亜之理解－江戸時代知識分子的“新清史”」『民族史研究』第 9 輯, 査読有, 392-437 頁, 2010 年.
- ⑥山下須美礼「明治初期日本人信徒による『正教会』理解－士族ハリスティアニに注目して－」『社会文化史学』第 53 号, 査読有, 27-40 頁, 2010 年.
- ⑦楠木賢道「『二国会盟録』からみた志筑忠雄・安部龍平の清朝・北アジア理解－江戸時代知識人の New Qing History?－」『社会文化史学』第 52 号, 査読有, 1-30 頁, 2009 年.
- ⑧楠木賢道「江戸時代知識人が理解した清朝」『別冊 環 清朝とは何か』第 16 号, 査読

有, 240-253 頁, 2009 年.

- ⑨楠木賢道「編入清朝八旗の扎嚕特部蒙古族」『中国辺疆民族研究』第 2 輯, 査読有, 360-366 頁, 2009 年.
- ⑩山下須美礼「士族ハリスティアニの在村時代－その日常と知的営為－」『歴史人類』第 37 号, 査読有, 45-62 頁, 2009 年.
- ⑪浪川健治「本州アイヌにおけるイオマンテ儀礼の可能性－解明へのアプローチとその方法をめぐって－」『北海道大学総合博物館研究報告』第 4 号, 査読有, 133-138 頁, 2008 年.
- ⑫楠木賢道「清朝檔案史料からみたサンゲ・ギヤムツォ殺害」細谷良夫編『清朝史研究の新たな地平』山川出版社, 査読無, 163-187 頁, 2008 年.
- ⑬楠木賢道「康熙帝側近一商南多爾濟的奏摺」『明清檔案与歴史研究論文集 下』新華出版社, 査読有, 1090-1098 頁, 2008 年.
- ⑭山下須美礼「八戸におけるハリストス正教会の成立と展開－受洗者名簿の記録から－」『弘前大学國史研究』第 124 号, 査読有, 23-40 頁, 2008 年.

〔図書〕(計 7 件)

- ①浪川健治他編著『周辺史から全体史へ』清文堂出版, 368 頁, 2009 年.
- ②浪川健治編著『近世の空間構造と支配』東洋書院, 315 頁, 2009 年.
- ③古家信平他編著『日本の民俗 12 南島の暮らし』吉川弘文館, 280 頁, 2009 年.
- ④・楠木賢道『清初対モンゴル政策史の研究』汲古書院, 304 頁, 2009 年.
- ⑤浪川健治他編著『地域ネットワークと社会変容』岩田書院, 460 頁, 2008 年.
- ⑥浪川健治他編著『北方社会史の視座 歴史・文化・生活』第 2 巻, 清文堂, 1-410 頁, 2008 年.
- ⑦古家信平他編著『日本の民俗 5 家の民俗文化誌』吉川弘文館, 258 頁, 2008 年.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浪川 健治 (NAMIKAWA KENJI)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号: 50312781

(2) 研究分担者

古家 信平 (FURUIE SHINPEI)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号: 40173520

楠木 賢道 (KUSUNUKI YOSHIMICHI)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号: 50234430

山下 須美礼 (YAMASHITA SUMIRE)
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号：90523267